《論　文》

「返事の強制」と理解の相関に関する実験
―スポーツ・コミュニケーションの試み―

松田　哲

An experimental study of the correlation or disassociation between forced response and comprehension in sports communication

Tetsu MATSUDA

キーワード：返事の強制　理解　コミュニケーション　ヒアリングテスト　実験
Key Words:

［要　旨］

スポーツ関連の部活動やクラブ等では，選手や競技者に対し，指導者が返事を強要し，個人の理解度・納得度に関係なく，元気がよく大きな声で「返事」をするよう指導することがある。しかし，その返事が「個人の理解」を前提にしたものであるかは疑問である。理解することが目的なのではなく，指導者の話に対して，「返事」をすること自体が目的化しており，返事は機械的に反応するものとして形式化しているように感じられる場面も少なくない。そこで，大きな声で元気よく「返事」をする者は，その指導者の話の内容を理解しているかを明らかにすることを目的として，返事と理解の実験を行った。実験を通して，「強制的に返事」をすることが，指導者の話した内容に対して「理解」を保証するものではないという仮説が検証された。むしろ指導者の話を理解させるには「その場でノートを取らせる」ことや「すぐにまとめられる環境を整える」方が効果的であった。返事の強制は，レスポンスをすることやそのタイミングを図ることに意識が集中してしまい，話の内容を理解するというところまで意識が及ばないものと考えられる。

1．はじめに

スポーツ社会学において，「社会化」は重要なテーマの一つである。ケニヨン（Kenyon. G.S）とマックファーソン（McPherson. B.D）は，スポーツの社会化について，「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」という二つのプロセスから捉えている。特に後者はスポーツ参加を通して，態度や価値を学ぶことにより，性格形成や社会性の発達にいかなる役割を果たすかに焦点が当てられている。[1] スポーツを通して社会性を身につけていくことは，それに直

接従事する選手や競技者のみならず，指導者や関係者また子どもにスポーツをさせようとする保護者や教師にとっても，等しく望み願うところである。

ところが，永井（2004）は，門脇の提唱した「社会力」の概念を引用し，その能力が少年スポーツチーム等の中で育ちにくくなっていることを訴えている。[2] 門脇は，現代の子供たちに欠如している「社会力」を「他者を認識する能力」と「他者への共感能力ないし感情移入能力」の二つを挙げ，特に現代の子どもたちを取り囲む環境は「他者と現実の喪失」を増大させ，これら二つの能力が育ちにくくなっていると指摘している。[3] 永井は少年スポーツチームの中にも「勝利こそがすべて」という勝利至上主義が持ち込まれ，負けたチームへの配慮を欠く場面や，教育的な意義を見いだせない状況が散見できると指摘し，「他者の立場を認識する」ことや「他者に共感する」といった社会性の育成に対するスポーツの役割に懐疑的である。また「あいさつ」や「返事」についても，「その場限りの儀式」になっていると指摘している。つまり，試合会場やユニフォーム姿であるときは，チーム一同正しくあいさつが出来るのに，ユニフォームを脱いだ後や，一人のときはあいさつが出来ない子どもたちが多いというのである。[2]

その一方で，集団のまとまりを左右する「擬集性」も，所属集団に魅力を感じる重要なファクターの一つであろう。スポーツ集団の場面では，チームワーク・団結・連帯感・結びつきの強さ等がそれに該当する。[4] この擬集性を醸成するために，選手や競技者はしばしばチームの中で同調行動をとる。この同調行動におけるコミュニケーションの実験を行ったのが，ジョンズ（Jones, E.E. 1964）である。彼の実験は，海軍のROTC隊の新入生と上級生を対象に行われたものであるが，その結論は「話題が集団に関連があるほど低い地位の新入生はパートナーの意見に同調する傾向がみられ，やや不安定であった低い地位の新入生は，高い地位の上級生の意見に従うことによって，高い地位の人から承認を得られると考える」というものであった。[5] これらの同調行動ともいえるものの一つに「返事の一斉返答」があげられる。指導者や上級生の話，問いかけ等に対して，「ハイ」という返事を半強制的に返すというものである。高畑（2003）は，『強豪校の練習風景をみると，コーチが何らかの指示を与えた後に，選手たちが一様に「はいわかりました」と答えているのに気づきます。選手たちが本当にコーチの指示を理解したかどうかは分かりませんが，「はい」と答えるのが反射条件のようになっている気がします。』と述べている。つまり「ハイ」と答えることが習慣化していて，教えられたことを本当に理解しているかどうか疑問であるということである。[6]

しかし，ここでは選手たちが「ハイ」と反応することを否定するわけではない。マタラッツオ（Matarazzo, J.D 1964）は「うなずき」の実験で，面接官の「うなずき」行為が，受験者の発言量を増大させることを証明している。[7] また川名（1986）は，話し手は相づち・うなずきを行う聞き手を好意的に評定することを示している。さらにこれらの行為が社会的承認の満足をもたらすもので，相互作用を促進する報酬価を持つ手がかりであることも指摘している。[7]

つまり，運動部等で多くみられる選手や部員たちに「ハイ」という返事を強制させることは，

話や指示を出す指導者側（監督・コーチ）にとって，社会的な満足を得るものであり，肯定的な承認を得られることから，講話はより長くかつ熱心に促進される効果をもたらしていることは容易に想像される。

しかしここでは，社会的相互作用としての指示行為と返事という反応に視点を置くのではなく，高畑が指摘するように「ハイ」という反応は，儀式的・習慣的な日常行為として反射的にしていることであり[6)]，選手や部員たちの「理解」を前提にされていない行為であることに着目したい。「ハイ」と返事をすることは，社会的には望ましい行為であり，一斉同一の返答（反応）は，集団の擬集性を高める効果も期待される。また同調行動としても，特に地位の高い人たちからは好意的な評価が期待される行為でもあることは前述した通りである。

2．実験の目的

そこで，選手や部員たちの「ハイ」という返事が，当人たちの「理解」を前提にされている行為なのか，高畑の指摘するように，条件反射的かつ習慣的な行為なのかに注目しながら，強制的な「返事」と「理解」についての相関を調べていくことにする。

繰り返しになるが，指導者・競技者間において，情報の伝達（話し）とそれに伴う「返事」は，コミュニケーションの視点からも自然な社会的行為であり，社会的な評価としてはむしろ「好ましい」ことである。従ってスポーツ関連の部活動やクラブ等では，選手や競技者，部員に対し，指導者が返事を強要し，個人の理解度・納得度に関係なく，元気よく大きな声で「返事」をするよう指導することがある。（指導者からの強制ではなく，伝統としての行為である場合も含む）

しかし，その返事が個人の「理解」を前提にしたものであるかは疑問である。理解することが目的なのではなく，指導者の話に対して，「返事」をすること自体が目的化していて，返事は機械的に反応するものとして形式化しているように感じられる場面も少なくない。

以上のような問題提起を踏まえ，ここでは，返事と理解の実験を通して，強制的に「返事」をしている者は，その指導者の話の内容を理解しているかを明らかにすることを目的としている。また，「理解」を前提にするのであれば，「返事を強制的させるより，その場でメモを取らせる（チェックする）」方が効果的であることについても検証を試みるものである。

この実験は2009年～2010年の２年間，大学のゼミ学生を対象に実施したものである。

3．実験の進め方

前述の課題を明らかにするために，大学生を以下の３つのグループに構成した。このグループは機械的に配分されたメンバーであり，特に条件等はない。

Ｒグループ（Response Group）
　…「ハイ」と強制的に返事をするグループ
Ｓグループ（Silent Group）
　…返事をしないで黙って聞いているグループ
Ｃグループ（Check Group）
　…その場で回答（正答をチェック）するグループ

Response Group（以下「Ｒグループ」）は，指導者が出す全ての問題に対して，「ハイ」と強制的に返事をするグループである。

Silent Group（以下「Ｓグループ」）は，指導者が出す問題に対して，返事をしないで黙って聞いているグループである。

そして，Check Group（以下「Ｃグループ」）は，指導者が出す問題に対して，その場で回答（正答をチェック）するグループである。

【進め方】

①第１段階

指導者は１回に10個の問題をゆっくりと読み上げる。この時の問題内容は，一般常識問題で，○か×で回答できるように出来ている。（巻末付録参照）そして実験はヒアリングテストとプリントテストの２つを比較することで，仮説を検証するものである。

まず，Ｒグループは個人の理解に関係なく，全ての問題に対して強制的に「ハイ」と返事をしながら，○と×の回答を考える。（ヒアリングテスト）

Ｓグループは，指導者の読みあげた問題に対して，返事をしないで黙って聞きながら，○と×の回答を考える。（ヒアリングテスト）このとき，ＲグループとＳグループはヒアリングのみで，指導者の読み上げた問題を記憶しておく必要がある。

そしてCグループは，その場で○か×で回答する。Ｃグループには予め１～10まで番号だけが付けられている用紙を配布し，そこに指導者が問題を読み上げるごとに○か×をその場で記入させる。

この実験は，記憶力も影響があるので，各回ごとにメンバーチェンジをし，各人がそれぞれのグループ実験を経験できるようにしている。

②第２段階

指導者が10個の問題を読み終えてから，ＲグループとＳグループは，１～10まで番号のみが記されている解答用紙に○か×で回答を記入する。

③第３段階

最後に３グループ全員に，指導者が読み上げた10個の問題をプリントで配布し，その場で回答させる。（プリントテスト）これは，問題の難易度を調べるもので，もともとプリントを見ても解けないような内容であれば，「返事」の有無に関係なく理解できないと判断できるからである。テストは１問10点で，100点満点とし，問題はＡ～Ｅまで各10問，合計50問用意した。

４．実験の経緯と分析

2009年11月に大学生を前述のようにグループ化し実験を開始した。この時のグルーピングは機械的に振り分けたので，特に条件等はつけていない。またこの実験は記憶力も影響があるので，各回ごとにグループチェンジをして，各人がそれぞれのグループ実験を経験できるようにしている。

そして分析の比較は，ヒアリングテストとプリントテストを実施し，各グループによるテストの平均値を算出し，プリントテスト（問題を自分で読んだ上での理解力を計測）の平均値（ａ）とヒアリングテスト（指導者から問題を聞いた上での理解力を計測）の平均値（ｂ）との差を比較し，その格差を測定する。プリントテストの平均値とヒアリングテストの平均値に差（ｂ－ａ≒0）がなければ，指導者の読み上げた問題を理解しながら聞いていることになり，

その差が大きければ（ｂ－ａ＞0），指導者の読み上げた問題を理解していないということになる。従っていずれのケースも（ｂ－ａ）の結果を検証することになる。以下が実験の結果である。

［１回目］…問題Ａ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	8	77.5	81.3	3.8
Ｓグループ	7	85.7	88.6	2.9
Ｃグループ	7	98.6	83.6	－15.0

１回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループが3.8点と最も大きく，Ｃグループが－15点と最も低くなっている。これによるとＲグループは，自分で問題を見ながら回答したプリントテストの平均値が81.3点，それに対して，強制的に「返事」をしながら回答したヒアリングテストの平均値が77.5点ということになり，その差は3.8点である。しかし，Ｓグループはその差が2.9点と，自分で問題を見ながら回答した理解度とヒヤリングの理解度がＲグループよりも近くなっている。さらにＣグループでは，プリントテストよりもヒアリングテストの方が，理解度が高くなっていることが分かる。

［２回目］…問題Ｂ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	7	72.5	92.5	20.0
Ｓグループ	8	72.9	78.6	5.7
Ｃグループ	7	94.3	91.4	－2.9

２回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループが20点と最も大きく，Ｃグループが－2.9点と最も低くなっている。つまり，Ｒグループは，自分で問題を見ながら受けたテストはほぼ全員が理解していたが，強制的な「返事」をしながらのヒアリングテストでは７割しか理解できていないことになる。

［３回目］…問題Ｃ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	7	66.3	78.3	12.0
Ｓグループ	7	64.0	74.0	10.0
Ｃグループ	8	82.9	82.9	0

この問題Ｃは，重構造の問題形式になっており，特にヒアリングテストでは，難易度が高くなっている。（巻末付録参照）３回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループが12点と最も大きく，Ｃグループが０点と最も低くなっている。つまりこの問題でもＣグループがどちらのテストでも理解が高くなっていることを明らかにしている。同じヒアリングテストを，Ｒグループ・Ｓグループと比較してもＣグループが約20点近く高くなっていることが分かる。

［４回目］…問題Ｄ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	8	74.0	95.0	21.0
Ｓグループ	7	75.7	92.9	17.2
Ｃグループ	7	84.0	84.0	0

この問題Ｄは，Ａ～Ｃ問題のような肯定文問題ではなく，否定文で構成された10問であり，特にヒアリングテストでは難易度が高くなっている。（巻末付録参照）４回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループが21点と最も大きく，Ｃグループが０点と最も低くなっている。ここでも同じヒアリングテストを，Ｒグループ・Ｓ

グループと比較してもＣグループが約10点近く高くなっている。難易度の高い問題でもＣグループのように，その場でチェックをする方が，理解度が高くなることが分かる。

続いて，2010年になってから大学生を３つのグループに分け，同じ実験を試みた結果である。

ここでのゼミ学生は前年の実験の時とは違う学年の学生である。

［５回目］…問題Ａ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	5	88.0	95.0	7.0
Ｓグループ	5	84.0	98.0	4.0
Ｃグループ	5	94.0	96.0	2.0

５回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループが７点と最も大きく，Ｃグループが２点と最も低くなっている。ここでの結果も前年度の結果と同じく，強制的な「返事」をするＲグループの理解度がヒアリングテストで低く，ヒアリングテストの中ではＣグループが最も高くなっている。

［６回目］…問題Ｂ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	5	90.0	96.0	6.0
Ｓグループ	5	78.0	84.0	6.0
Ｃグループ	5	94.0	92.0	2.0

６回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループとＳグループが６点の同点で最も大きく，Ｃグループが２点と最も低くなっている。

［７回目］…問題Ｃ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	5	76.0	94.0	18.0
Ｓグループ	5	80.0	84.0	4.0
Ｃグループ	5	80.0	82.0	2.0

７回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループが18点と最も大きく，Ｃグループが２点と最も低くなっている。ここでも前年同様難易度の高い問題ではあるが，強制的な「返事」をするＲグループの理解度が最も低くなっている。

［８回目］…問題Ｄ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	5	78.0	88.0	10.0
Ｓグループ	5	86.0	92.0	6.0
Ｃグループ	5	90.0	96.0	6.0

８回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループが10点と最も大きく，ＳグループとＣグループが６点と同点で最も低くなっている。ここでも前年同様難易度の高い問題ではあるが，強制的な「返事」をするＲグループの理解度が最も低くなっている。またヒアリングテストの中ではＣグループが最も高くなっている。

［９回目］…問題Ｅ使用

グループ	人数	ヒアリングテストの平均（ａ）	プリントテストの平均（ｂ）	（ｂ－ａ）
Ｒグループ	5	88.0	100.0	12.0
Ｓグループ	5	88.0	92.0	4.0
Ｃグループ	5	86.0	92.0	6.0

９回目の両テストの差（ｂ－ａ）はＲグループが12点と最も大きく，Ｃグループが６点となっている。これまで，どの実験結果も同じよ

うな傾向を示している。つまり強制的な「返事」をするＲグループの理解度が最も低く，その場でチェックするＣグループの理解度が高くなっているということである。

５．実験結果の考察と課題

以上９回の実験を２年間に渡り実施してきた。この間ゼミ学生も入れ替わり，違う環境で同種の実験が実施されたことになる。

そして９回とも，プリントテストの平均（ｂ）とヒアリングテストの平均（ａ）の差（ｂ－ａ）はＲグループが最も大きく，Ｃグループが最も少なくなるという結果が得られた。このことによって，強制的に「返事」をすることが，指導者の話した内容に対して「理解」を必ずしも保証するものではないということが検証されたことになる。むしろ指導者の話を理解させるには「その場でノートを取らせる」ことや「すぐにまとめられる環境を整える」方が効果的であるということになる。

つまり高畑の指摘する通り，選手や部員たちの「ハイ」という返事は，当人たちの「理解」を前提にしたものではなく，条件反射的かつ習慣的な行為であることが正しいと考えられる。対人コミュニケーションにあっては，個人が呼び止められた時に「反応」としての「返事」と「理解」を確認するための「返事」がある。多くのスポーツ場面で指導者等が求めている行為は前者のものであって，後者ではないと考えられるが，それらを指導者自身も混同してしることは十分に考えられる。また先輩・後輩といった上下関係において培われる伝統的風土もこれらの反応を同一化している要因として考えられる。

後者の場合，「ハイ」という返事の強制は，レスポンスをすることやそのタイミングを図ることに意識が集中してしまい，話の内容を理解するというところまで意識が及ばないものと考えられる。

ただし，指導者の話に対して元気よく「返事」をさせることが悪いということではない，冒頭にも触れたように，社会的な行為としては必要なものであり，実社会では「好ましい」態度として評価されるものである。しかし，ロングミーティングなど，指導者の長時間にわたる訓示や講話は，選手や競技者の「理解」という側面に立てば，効果的ではないということである。その意味で「理解させたい内容」である場合は，「聞き手にその場でメモをとらせる」ように環境を工夫した方が効果的であるということになる。

今回は，指導者による読み上げによって実験を試みたが，問題を録音することで，同じ条件による環境整備が容易になる。今後は問題の内容精査を含め，録音での試みやグループの適正規模等，実験の環境整備を工夫し実験の精度を高めていく必要がある。

【付録】ゼミ実験問題（一部）と解答（例）

問題A

○①日本で一番高い山は富士山である。
○②江戸幕府を開いたのは徳川家康である。
×③日本で一番大きな湖は霞ケ浦である。
×④茨城県の県庁は土浦市にある。
×⑤アメリカの首都はニューヨークである。
×⑥一万円札の人物は野口英世である。
○⑦中国の首都は北京である。
×⑧沖縄県はアメリカの領土である。

×⑨横綱朝青龍は韓国人である。
×⑩東京都庁は上野にある。

問題Ｃ（重構造問題）

×①明治に「学問のススメ」を書いたのは早稲田大学を創った福沢諭吉である。
×②Ｊリーグはプロのバスケットボールリーグとして活動している。
×③モナリザを書いたのは，地動説で有名なレオナルド・ダヴィンチである。
×④2016年に行われる東京オリンピックではゴルフと6人制ラグビーが採用される。
×⑤明日のおとといは今日である。
×⑥午後11時は22時である。
×⑦イギリスのオバマ大統領は黒人である。
○⑧日本に原爆が落とされたのは長崎と広島である。
×⑨石川寮選手は大学生のプロゴルファーである。
×⑩今年のプロ野球で優勝したのは原監督率いる日本ハムファイターズだ。

問題Ｄ（否定問題）

×①万里の長城は中国にはない。
○②石川寮選手は女子プロゴルファーではない。
×③水泳の北島康介選手は，オリンピックで金メダルをとっていない。
×④現在の政権は民主党ではない。
×⑤桃太郎の家来に犬はいない。
×⑥3+9+8＝20ではない
○⑦地球の周辺を回っている星は火星ではない。
×⑧筑波山は茨城県にはない。
×⑨浦島太郎が助けたのはカメではない。
○⑩モーツアルトは女性音楽家ではない。

【参考文献】

1）「スポーツの社会学」池田勝・守能信次編　杏林書店　1998
2）「スポーツは「良い子」を育てるか」永井洋一　日本放送出版協会　2004
3）「子供の社会力」門脇厚司　岩波新書　1999
4）「スポーツ社会学」メディカルフィトネス協会監修　嵯峨野書院　2002
5）「人間とコミュニケーション」原岡一馬編　株式会社ナカニシヤ出版　1990
6）「チームを強くするコーチング術」高畑好秀著　山海堂　2003
7）「しぐさのコミュニケーション」『セレクション社会心理学14』大坊郁夫著　サイエンス社　1998